

Title	出産後自己免疫性甲状腺症候群に関する研究
Author(s)	網野, 信行
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/34836
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・(本籍)	あ 網	の 野	の 信	ゆ き 行
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	6617	号	
学位授与の日付	昭和59年10月8日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	出産後自己免疫性甲状腺症候群に関する研究			
論文審査委員	(主査)			
	教授	宮井	潔	
	(副査)			
	教授	熊原	雄一	教授 垂井清一郎

論 文 内 容 の 要 旨

(目 的)

出産後に発生する甲状腺機能異常症としては、従来シーハン症候群における下垂体性甲状腺機能低下症が知られているのみであった。1976年筆者は出産後自己免疫性甲状腺症候群という新しい病態を見出した。本研究ではこの症候群の臨床的特徴、出現頻度および発症機作につき検討を行なった。

(方法と成績)

出産後に発生した原発性甲状腺機能低下症25例の対象のうち3例は永続性甲状腺機能低下症であり、残りは一過性であった。これらの一過性出産後甲状腺機能低下症は以下の様な特徴がみられた。甲状腺腫大は発症前より高頻度に存在し、出産後1～3カ月目からび慢性腫大を示すが6～12ヶ月目には自然縮小する。甲状腺機能では、出産後1～3カ月目に放射性ヨード摂取率低値の破壊性甲状腺中毒症を示し、これに引き続き3～5カ月目に原発性甲状腺機能低下症が発生するが、出産後6～12カ月目に自然回復する。抗甲状腺マイクロゾーム抗体は高値陽性を示す。出産後、より早期により著明な破壊性甲状腺中毒症を示した例では、これに引き続きより著明な甲状腺機能低下症が発生した。以上のことからこれらの変化は自己免疫性甲状腺炎(橋本病)が出産後増悪して発生するものと推測された。寛解バセドウ病もその78%で出産後種々のタイプの甲状腺中毒症が発生することが判明した。これらの検索および他の多数例についての分析の結果、出産後自己免疫性甲状腺症候群は以下の4つの型に大別できた。すなわち

- (1) 破壊性甲状腺中毒症に引き続き一過性甲状腺機能低下症が発生するもの。
- (2) 破壊性甲状腺中毒症に引き続き永続性甲状腺機能低下症が発生するもの。

- (3) 一過性甲状腺中毒症のみのもの（甲状腺放射性ヨード摂取率が高値、正常又は低値）
- (4) 永続性甲状腺中毒症（バセドウ病タイプの甲状腺中毒症）である。

これらの出産後自己免疫性甲状腺症候群の出現頻度を明らかにするため、一般妊婦 507 例を対象に、甲状腺機能異常のマスキングを行なった。出産後 3～8 カ月において、一過性甲状腺中毒症 13 例、一過性甲状腺中毒症に続く一過性甲状腺機能低下症 7 例、一過性甲状腺機能低下症 7 例、永続性甲状腺機能低下症 1 例、合計 28 例（5.5 %）の異常がみられ、うち 25 例は抗甲状腺マイクロゾーム抗体陽性であった。永続性甲状腺機能低下症の出現頻度（0.2 %）はシーハン症候群のそれ（0.003 %）に比し約 100 倍もの高値であった。

本症候群の発症機作を検索するため、15 例の橋本病患者を対象に妊娠初期より出産後 8 カ月まで血中甲状腺ホルモン、末梢リンパ球数、抗甲状腺マイクロゾーム抗体価の自然変動を調べた。妊娠中甲状腺腫の縮小および血中 TSH 値、末梢リンパ球数、マイクロゾーム抗体価の減少がみられたが、出産後は甲状腺機能異常の発生と平行して甲状腺腫、リンパ球数およびマイクロゾーム抗体価の増大がみられた。

（総括）

新しく見出した出産後自己免疫性甲状腺症候群につき以下の研究結果を得た。

1. 本症候群は自己免疫性甲状腺疾患が出産後増悪して発生するものと考えられた。
2. 本症候群の甲状腺機能異常は出産後 1～8 カ月にみられ、(1)破壊性甲状腺中毒症に引き続き一過性甲状腺機能低下症を示すもの、(2)破壊性甲状腺中毒症に引き続き永続性甲状腺機能低下症を示すもの、(3)一過性甲状腺中毒症のみを示すもの、(4)永続性甲状腺中毒症の 4 つに大別された。
3. 本症候群の出現は一般妊婦の 5.5 % の高頻度に見られた。

論文の審査結果の要旨

本研究は、自己免疫性甲状腺疾患が出産後増悪し、種々のタイプの甲状腺機能異常が発生することを初めて明らかにしたものである。

しかも、本症候群は、一般女性の出産後に 5.5 % の高頻度出現がみられることも明らかにされた臨床内分泌学および臨床免疫学に大きな新知見を加えた画期的な仕事であり、医学博士の学位を授与する価値のある研究と認める。